研究ノート

『分門纂類唐宋時賢千家詩選』に見えない『千家詩』七言絶句

三野豊浩

提　要

在中国，《千家诗》是家喻户晓的一部启蒙性诗歌选集。它一共辑录了二百二十六首近体诗，包括九十四首唐宋七言绝句。我把其中四十八首已经在《语言与文化》第四十五号上介绍了。这里，把除了这些以外的其他四十六首按着《千家诗》原本的排列来介绍。基本上，以影印本《白话注解千家诗》为作业的基础，可是这本书的表记有某种问题的时候，也参考了《全唐诗》《全宋诗》等其他文献来加以修改。这样，把《千家诗》所辑录的整个七言绝句都介绍了一遍。可以说，这是以后研究的重要基础。

关键词：《千家诗》、《分门纂类唐宋时贤千家诗选》、《白话注解千家诗》、七言绝句

はじめに

『千家詩』は、中国では一般によく知られる初心者向けの漢詩選集である。同書は五言と七言の近体詩（絶句と律詩）合計二二六首を収録しており、七言絶句に限って言えば、唐宋の詩人の作品合計九十四首を収録している。本稿では、そのうち『言語と文化』第四十五号（二〇二二年一月）掲載の拙稿「『分門纂類唐宋時賢千家詩選』所収の『千家詩』七言絶句」で紹介した四十八首を除く残りの四十六首を『千家詩』の収録順に紹介する。本稿は一応独立した論稿となっているが、ある意味で同拙稿の補足であり、二篇あわせて『千家詩』の七言絶句全九十四首をともかくも一通り紹介することになる。これらは、以後の研究活動の重要な基礎となるものである。

執筆にあたっては『千家詩』の古いテキストの影印本である

『白話注解千家詩』（江蘇広陵古籍刻印社影印、揚州古籍書店発行、一九九一年。以下『注解』と略記）を一応の基礎とした。ただしその表記に問題があると考えられる場合は、『全唐詩』『全宋詩』などを参照し、適宜修正した。変更した箇所はゴシック体で示した。なお変更すべきか否かの判断は、多分に筆者の主観による。作者の間違いは一律に訂正したが、詩題や詩句の異同は、一般に知られているものと一致しない場合でも、そのままで意味が通じる場合は原則そのままとした。また表記は原則として新字体とした。各詩題の上の数字（〇一など）は『注解』における収録順を意味する。これは原書にはなく、筆者が独自に補ったものである。

大意の執筆にあたっては、以前『言語と文化』第四十三号（二〇二〇年七月）に発表した拙稿「『千家詩』所収作品の日本における紹介状況―七言の作品を中心に―」に列挙した各書を参照したが、煩瑣になるので、本稿では逐一掲載することはしなかった。表現はなるべくオリジナルであるように努めたつもりであるが、参照した文献が透けて見える場合もあるかも知れない。御寛恕いただければ幸いである。また本稿がウェブ上で公開された場合は一般の読者の目にも触れることを想定し、ルビをやや多めに振った。

〇一　春日偶成　　春の日に偶たま成る　　程顥

雲淡風軽近午天　　雲　淡く　風　軽く　午天に近し
傍花随柳過前川　　花に傍い　柳に随いて　前川を過ぎる
時人不識余心楽　　時人は識らず　余の心の楽しめるを
将謂偸閑学少年　　将に謂わんとす　閑を偸みて少年を学ぶと

【詩題】『全宋詩』巻七一五「偶成」。たまたまできた詩、の意。
【作者】程顥、字は伯淳、通称は明道先生。北宋の代表的な儒者。
【詩句】第二句「傍」、『全宋詩』「望」。第三句「時」、『全宋詩』「旁」。「余」、『全宋詩』「予」。
【大意】道学者が春の散歩を楽しむ情景をうたう。雲は淡くかかり、風は軽やかに吹き、時刻は正午に近い。花とヤナギに沿って歩き、前方の平原にたどり着いた。今時の人たちは私の心が楽しんでいることを知らず、暇をぬすんで若者たちのまねをしていると思うことだろう。
【補足】「川」は日本語の「かわ」ではなく、平原、原野の意。
【韻字】天、川、年（下平一先）。

〇二　春日　　春日　　朱熹

勝日尋芳泗水浜　　勝日　芳を泗水の浜に尋ぬれば

無辺光景一時新　無辺の光景　一時に新たなり
等閑識得東風面　等閑に識り得たり　東風　面すれば
万紫千紅総是春　万紫　千紅　総て是れ春となるを

【詩題】『全宋詩』巻二三八四「春日」。
【作者】朱熹、字は元晦、号は晦庵。南宋の代表的な儒者。『注解』は蘇軾とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】春の散歩に託して聖人の教えを学ぶべきことをうたう。心地よく晴れた日に花をたずねて泗水のほとりを散歩すれば、どこまでも果てしない光景は一時に新しくなる。ことさら何もせずに知ることができた。春風が吹いて来さえすれば、色とりどりの花々が咲き乱れ、すべてが春となることを。
【補足】春風が吹けばすべてが春となるように、聖人の教えに接することで新しい認識を得ることができる、との寓意。
【韻字】浜、新、面（上平十一真）。

○四　城東早春　　城東の早春　　楊巨源

詩家清景在新春　詩家の清景は新春に在り
緑柳纔黄半未匀　緑柳　纔かに黄なるも　半ばは未だ匀わず
若待上林花似錦　若し上林の花の錦に似たるを待たば
出門俱是看花人　門を出ずれば俱に是れ花を看るの人ならん

【詩題】『全唐詩』巻三三三「城東早春」。
【作者】楊巨源、字は景山。中唐の詩人。
【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。
【大意】町の東の早春の風景をうたう。詩人の愛するすばらしい風景は新春にこそある。ヤナギの若葉はようやく色づきはじめたばかりで、半ばはまだ生えそろっていない。だがもし上林苑の花が錦のように咲き誇るのを待っていたら、その頃には、家の門を出た途端、どこもかしこも花見の客ばかりになってしまうだろう。（そうなってからではもう遅い。）
【補足】上林苑は漢代の御苑の名。それによって唐代の御苑をたとえる。『注解』はこの詩を、もし優秀な人材を得たければ、その人物がまだ頭角を現さないうちにスカウトすべきことをたとえるものと解説する。
【韻字】春、匀、人（上平十一真）。

○六　初春小雨　　初春の小雨　　韓愈

天街小雨潤如酥　天街の小雨　潤いて酥の如し
草色遥看近却無　草色　遥かに看るも近ければ却って無し
最是一年春好処　最も是れ　一年　春の好き処
絶勝煙柳満皇都　絶だ勝る　煙柳の皇都に満つるに

【詩題】『全唐詩』巻三四四「早春呈水部張十八員外二首」其一。
【作者】韓愈、字は退之、通称は昌黎先生。中唐の代表的な詩人。
【詩句】第二句、『注解』は「草色近看遠却無」とするが、『全唐詩』に従う。
【大意】雨にけぶる初春の都の情景をうたう。都大路はまるで乳の汁を注いだかのようにしっとりと小雨に濡れている。遠くから眺めると青々と目に映る草の色も、近くで見ると何も生えていないかのようだ。これこそが、一年で一番すばらしい春のひととき。柳の若葉が都にいっぱいになる春の盛りよりもずっとすばらしい。
【補足】酥は、牛や羊の乳を精練した飲料。
【韻字】酥、無、都（上平七虞）。

○七　元日　　王安石

爆竹声中一歳除　　爆竹声中　一歳　除かれ
春風送暖入屠蘇　　春風　暖を送りて　屠蘇に入らしむ
千門万戸曈曈日　　千門　万戸　曈曈たるの日
総把新桃換旧符　　総て新桃を把りて旧符に換う

【詩題】『全宋詩』巻五六四「元日」。
【作者】王安石、字は介甫、号は半山。北宋の代表的な詩人。
【詩句】第二句「春」、『全宋詩』「東」。第四句「総把」、『全宋詩』「争挿」。
【大意】元日の情景をうたう。爆竹の鳴り響く中、古い年が過ぎ去り、春風が暖かさを運んで来て、正月を祝う酒の中にそれを入らせる。何千何万という家々が朝日の輝きに包まれるこの日。どの家でも新しい桃のお札を古いお札と取り換えている。
【補足】『注解』はこの詩を、王安石が神宗の信任を得て新法の政治を行うことのたとえと解説する。
【韻字】除、蘇、符（上平七虞）。

○九　立春偶成　　張栻

律回歳晩氷霜少　　律　回り　歳晩　氷霜　少なり
春到人間草木知　　春　人間に到り　草木　知る
便覚眼前生意満　　便ち覚ゆ　眼前に生意の満つるを
東風吹水緑差差　　東風　水を吹き　緑　差差たり

【詩題】『全宋詩』巻二四二〇「立春日禊亭偶成」。
【作者】張栻、字は敬夫、号は南軒。南宋の代表的な儒者。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】立春の日にたまたまできた詩。季節がひとめぐりして一年の終わりに近づき、氷や霜はほとんどなくなった。世の中

に春がやって来たことは、草木が真っ先に知る。すぐそれとわかる、目の前に生気が満ちあふれていることが。春風が川面に吹きつけ、緑色の水面が不ぞろいな高さに波立っている。

【韻字】知、差（上平四支）。

一二　廷試　　廷試　夏竦

殿上衮衣明日月　殿上の衮衣　明らかなること日月のごとく
硯中旗影動龍蛇　硯中の旗影　龍蛇を動かす
縦横礼楽三千字　縦横たり　礼楽　三千字
独対丹墀日未斜　独り丹墀に対し　日　未だ斜めならず

【詩題】『全宋詩』巻一六一「廷試」。『注解』は「〔宮詞〕其二」とするが、『全宋詩』に従う。

【作者】夏竦、字は子喬。北宋の詩人。『注解』は王建とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。

【大意】朝廷で天子が臨席して行われる試験の情景をうたう。宮殿の上の天子様のお召し物は、太陽や月のように明るく輝いている。硯の中の墨汁に映る旗指物の龍の模様は、ゆらゆらと揺れ動いて見える。縦横に書き記すのは、礼楽に関する三千字の大論文。ただ一人、朱塗りの階段に向き合い、日はまだ傾いていない。

【韻字】蛇、斜（下平六麻）。

一三　詠華清宮　　華清宮を詠ず　杜常

行尽江南数十程　行き尽くす　江南　数十程
暁風残月入華清　暁風　残月　華清に入る
朝元閣上西風急　朝元閣上　西風　急なり
都入長楊作雨声　都て長楊に入りて雨声を作す

【詩題】『全宋詩』巻七八一「過華清宮」。華清宮は、長安にあった唐代の離宮の名。

【作者】杜常、字は正甫。北宋の詩人。『注解』は王建とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】第四句「楊」、『注解』は「揚」とするが、『全宋詩』に従う。

【大意】長安の華清宮をうたう。江南地方から数十日もの旅程を経た末に、明け方の風が吹き月が沈みかける頃、ようやく華清宮にたどり着いた。朝元閣の上では秋の風がしきりに吹き、それはすべて長楊宮のシダレヤナギに吹き入って、雨が降るような音をたてる。

【補足】この詩は『全唐詩』にも見えるが、宋詩として扱う。朝元閣は、華清宮の中にある楼閣。長楊閣は漢代の宮殿の名

で、白楊を多く植えてあった。

【韻字】程、清、声（下平八庚）。

一四　清平調詞　　清平調の詞　　李白

雲想衣裳花想容　　雲には衣裳を想い　花には容を想う
春風払檻露華濃　　春風　檻を払い　露華　濃やかなり
若非群玉山頭見　　若し群玉山頭にて見ゆるに非ずんば
会向瑤台月下逢　　会ずや瑤台月下に向いて逢わん

【詩題】『全唐詩』巻一六四「清平調詞三首」其一。清平調は楽府題。その歌詞の意。

【作者】李白、字は太白。盛唐の代表的な詩人。

【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。

【大意】楊貴妃の美しさをうたう。その衣裳はまるで雲のよう、そのお顔はまるで牡丹の花のよう。春風は欄干を払って吹きそよぎ、露の玉は美しく鮮やかに輝く。これほどの美人は、もし群玉山のほとりでお会いするのでなければ、きっと月に照らされた瑤台で出会うことだろう。

【補足】群玉山は、西王母が仙人たちを会した所。瑤台は、西王母の住む楼台。

【韻字】容、濃、逢（上平二冬）。

一五　題邸間壁　　邸の間壁に題す　　鄭会

酴醾香夢怯春寒　　酴醾の香夢　春寒に怯ゆ
翠掩重簾燕子閑　　翠　重簾を掩い　燕子　閑なり
敲断玉釵紅燭冷　　玉釵を敲断し　紅燭　冷ゆ
計程応説到常山　　程を計り応に説くべし　常山に到らんと

【詩題】『全宋詩』巻二九五九「題邸間壁」。邸は、旅館。間壁は、部屋の仕切りの壁。その上に詩を書きつける、の意。

【作者】鄭会、字は有極、号は亦山。南宋の詩人。『注解』は鄭谷とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】第二句「簾」、『注解』は「門」とするが、『全宋詩』に従う。

【大意】旅に出た夫が家で自分の帰りを待つ妻を思い、その立場になって作った詩。いとしい妻はトキンイバラの花の香りに包まれて夢を見ていたのに、春の寒さのせいで目を覚ましてしまった。緑の木々が重なる簾を覆い隠し、ツバメたちは所在なさげである。玉のかんざしを折るような雨の音の中、赤いロウソクの火はかすかになり、夜は更ける。きっと今頃、私の旅程を推しはかりながら、「あの方は今頃常山に着いたことでしょう」と話しているに違いない。

【補足】酴醾は、花の名。和名トキンイバラ。

【韻字】寒（上平十四寒）。閑、山（上平十五刪）。

一六　絶句　　絶句　　杜甫

両個黄鸝鳴翠柳　　両個の黄鸝　翠柳に鳴き
一行白鷺上青天　　一行の白鷺　青天に上る
窓含西嶺千秋雪　　窓は含む　西嶺　千秋の雪
門泊東呉万里船　　門には泊まる　東呉　万里の船

【詩題】『全唐詩』巻二二八「絶句四首」其三。
【作者】杜甫、字は子美。盛唐の代表的な詩人。
【詩句】第一句「個」、『全唐詩』「箇」。
【大意】成都の草堂から見える春の風景をうたう。二羽のコウライウグイスが青いヤナギの枝で鳴きかわし、一列のシラサギが青空に昇って行く。窓からは西の山に積もる万年雪が見え、門の前には東の呉の国から来た万里の船が停泊している。
【韻字】天、船（下平一先）。

二〇　社日　　社日　　王駕

鵝湖山下稲粱肥　　鵝湖の山下　稲粱　肥え
豚柵鶏棲対掩扉　　豚柵　鶏棲　掩扉に対す
桑柘影斜春社散　　桑柘　影　斜めに　春社　散じ
家家扶得醉人帰　　家家　醉人を扶け得て帰る

【詩題】『全唐詩』巻六九〇「社日」。
【作者】王駕、字は大用、号は守素先生。晩唐の詩人。『注解』は作者を張演とする。『全唐詩』ではこの詩は三箇所に見え、張演の詩としても収録されているが、本稿では通説に従い王駕の作とする。
【詩句】第二句「対」、『全唐詩』「半」。
【大意】村祭りの情景をうたう。鵝湖山のふもとでは、稲や粟が豊かに実る。ブタの囲いやニワトリ小屋は、閉じられた家の門に向きあっている。クワの木の影が斜めになる頃、春の村祭りはお開きとなり、それぞれに酔いつぶれた家人を支えながら家に帰って行く。
【補足】「社」は、春と秋に行われる村祭り。「秋社」とするテキストもあるが、『注解』および『全唐詩』に従う。稲が実るのは秋であるが、前年の収穫をさしていると考えれば、「春社」としてもおかしくはないと思われる。
【韻字】肥、扉、帰（上平五微）。

二三　上高侍郎　　高侍郎に上る　　高蟾

天上碧桃和露種　　天上の碧桃　露に和して種え
日辺紅杏倚雲栽　　日辺の紅杏　雲に倚りて栽う
芙蓉生在秋江上　　芙蓉　生じて秋江の上に在り
不向東風怨未開　　東風に向かいて未だ開かざるを怨まず

【詩題】『全唐詩』巻六六八「下第後上永崇高侍郎」。
【作者】高蟾は晩唐の詩人。
【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。
【大意】科挙の試験に落第した作者が、試験官と思われる人物に自分の心情を訴える。天上の世界の青い桃は露と一緒に植えられ、太陽に近い赤いアンズは雲の近くで栽培される。ただハスの花ばかりは秋の川のほとりに生い育つものなので、春風に向かって、まだ花が咲かないことをうらめしく思ったりはしない。
【補足】碧桃と紅杏は皇帝の恩恵を受けて栄えるものをたとえ、芙蓉は自分自身をたとえる。自分は遅咲きのハスの花のようなものなので、今回の落第を不服には思わない、というのである。ちなみに、作者は後に科挙に合格している。
【韻字】栽、開（上平十灰）。

二四　絶句　　釈志南

古木陰中繫短篷　古木の陰中　短篷を繫ぎ
杖藜扶我過橋東　杖藜　我を扶け　橋東を過ぎらしむ
沾衣欲湿杏花雨　衣を沾して湿らしめんと欲するは　杏花の雨
吹面不寒楊柳風　面を吹くも寒からざるは　楊柳の風

【詩題】『全宋詩』巻二三九五「詩一首」。
【作者】釈志南は宋代の詩僧。『注解』は僧志安とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】第一句「篷」、『注解』は「蓬」とするが、『全宋詩』に従う。
【大意】僧侶が春の散歩の情景をうたう。鬱蒼と古木の生い茂るその陰に小舟をつなぎ止め、アカザの杖に支えられて橋の東側へとやって来た。私の僧衣を濡らして湿らせようとするのは、アンズの花の季節の雨。顔に吹きつけても寒さを感じないのは、ヤナギの枝を揺らす風。
【韻字】篷、東、風（上平一東）。

二六　客中行　　李白

蘭陵美酒鬱金香　蘭陵の美酒　鬱金香
玉椀盛来琥珀光　玉椀　盛り来たる　琥珀の光
但使主人能酔客　但だ主人をして能く客を酔わしむれば
不知何処是他郷　知らず　何れの処か是れ他郷

【詩題】『全唐詩』巻一八一「客中行」。旅の途中のうた、の意。
【作者】李白は既出。盛唐の代表的な詩人。
【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。
【大意】旅の途中で作った酒のうた。蘭陵名産の美酒は鬱金の

香りを放ち、玉の杯になみなみと注がれて、琥珀色の光をたたえる。ただ主人が旅人の私を気持ちよく酔わせてくれさえするならば、どんな場所でも異郷でなどあるものか。（うまい酒が飲めれば、そこはどこでも故郷と同じである。）

【補足】蘭陵は酒の名産地。鬱金は香草の名。

【韻字】香、光、郷（下平七陽）。

二七　題屏　　屏に題す　　劉季孫

呢喃燕子語梁間　呢喃として　燕子　梁間に語り
底事来驚夢裏閑　底事ぞ　来たりて驚かす　夢裏の閑
説与傍人渾不解　傍人に説与するも　渾て解せず
杖藜携酒看芝山　杖藜　酒を携えて　芝山を看ん

【詩題】『全宋詩』巻七二三「題饒州酒務庁屏」。饒州は地名。酒務庁は酒に関する業務を司る役所。そこの屏風に書きつけた詩、の意。

【作者】劉季孫、字は景文。北宋の詩人。王安石および蘇軾の知遇を得た。

【詩句】第三句「渾」、『全宋詩』「応」。

【大意】役所の屏風に無聊な思いを書きつける。ペチャクチャとツバメたちは梁の間でおしゃべりに夢中。どういうわけでせっかく見ていたのどかな夢から呼び覚ますのだろうか。かたわらの人にそのことを話しても、まったくわかってもらえない。仕方ないので、アカザの杖をつき、酒を携えて、芝山寺へ見物に出かけるとしよう。

【補足】芝山は、饒州にある山の名前。また、そこにある寺の名前。

【韻字】間、閑、山（上平十五刪）。

二九　慶前庵桃花　　慶全庵の桃花　　謝枋得

尋得桃源好避秦　桃源を尋ね得て　好く秦を避く
桃紅又是一年春　桃　紅にして　又た是れ一年の春なり
花飛莫遣随流水　花　飛びては　流水に随わしむる莫かれ
怕有漁郎来問津　怕る　漁郎の来たりて津を問う有るを

【詩題】『全宋詩』巻三四七七「桃」。

【作者】謝枋得、字は君直、号は畳山。南宋末の詩人。元への出仕を拒み南宋に殉じた節義の士で、『千家詩』の作者に擬せられる。

【詩句】第二句「是」、『全宋詩』「見」。

【大意】尼僧院に隠れた尼たちに、居場所を知られないようにと忠告する。桃源郷を尋ね当てて、うまいこと秦の乱を避けることができた。春風が吹き、また新しい年の春となった。桃の花びらが飛んでも川の水に流してはいけない。漁師がやって来

て渡し場をたずねるのではないかと心配なので。

【補足】慶全庵は、尼僧院の名。所在は未詳。この詩は陶淵明「桃花源の記」をふまえ、南宋を滅ぼした元を秦にたとえている。尼僧には作者自身の心情が投影されているのであろう。

【韻字】秦、春、津（上平十一真理）。

三一　再遊玄都観　　再び玄都観に遊ぶ　　劉禹錫

百畝庭中半是苔　　百畝の庭中　半ばは是れ苔なり
桃花浄尽菜花開　　桃花　浄尽し　菜花　開く
種桃道士帰何処　　桃を種うる道士　何処にか帰る
前度劉郎今又来　　前度の劉郎　今　又た来たる

【詩題】『全唐詩』巻三六五「再遊玄都観并序」。玄都観は長安にあった道観（道教の寺院）の名。

【作者】劉禹錫、字は夢得。中唐の代表的な詩人。

【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。

【大意】作者の劉禹錫は「玄都観桃花」詩を書いて当時の権力者にうとまれ、都を追われた。その作者が赦されて都に戻った時の感慨をうたう。再び玄都観を訪れてみれば、百畝の広さの庭のなかばは苔がはえている。桃の花は跡形もなくなり、菜の花が咲いている。桃の木を植えた道士は、どこへ行ってしまったのだろう。以前の私劉郎は、今またここにやって来たというのに。

【補足】「玄都観桃花」詩は、拙稿「『分門纂類唐宋時賢千家詩選』所収の『千家詩』七言絶句」参照。ただし詩題は「遊玄都観」。

【韻字】苔、開、来（上平十灰）。

三三　花影　　花影　　謝枋得

重重疊疊上瑤台　　重重疊疊として瑤台に上り
幾度呼童掃不開　　幾度か童を呼び　掃くとも開かず
剛被太陽収拾去　　剛く太陽に被りて収拾し去らるるも
却教明月送将来　　却た明月をして送将り来たらしむ

【詩題】『全宋詩』巻三四七七「花影」。

【作者】謝枋得は既出。南宋末の詩人。『注解』は蘇軾とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】第四句「却」、『全宋詩』「又」。

【大意】よこしまな人物がはびこることを、花の影にたとえてうたう。花の影は幾重にも重なり合って美しい露台に上り、何度も召使いを呼び、掃き清めようとしても埒があかない。やっとのことで太陽が沈んで消え去ったものの、またしても月の光に照らされてよみがえって来た。（ああ何ともわずらわしい。）

【補足】『注解』はこの詩を蘇軾の作とし、花影を新法党の勢力

のたとえとするが、謝枋得の作であるとすれば、南宋末期の政治状況をたとえていると考えるべきであろう。

【韻字】台、開、来（上平十灰）。

三四　北山　　北山　王安石

北山輸緑漲横陂　北山　緑を輸し　横陂に漲る
直塹回塘灩灩時　直塹　回塘　灩灩たるの時
細数落花因坐久　細かに落花を数え　因りて坐すること久しく
緩尋芳草得帰遅　緩やかに芳草を尋ね　帰るを得ること遅し

【詩題】『全宋詩』巻五六五「北山」。

【作者】王安石は既出。北宋の代表的な詩人。

【詩句】第一句「陂」、『注解』は「波」とするが、『全宋詩』に従う。第二句「塹」、『全宋詩』「壍」。

【大意】政治家をやめて隠居した作者が、別荘の近くの山を散歩することをうたう。北の山から緑色の水が流れて来て、横たわる堤いっぱいになる。まっすぐな堀にも丸い池にも、水が満々とたたえられてきらめく時節になった。散る花を細かに数えていたために長い間すわっており、のんびりかぐわしい草を探し歩いたおかげで帰るのが遅くなった。

【韻字】陂、時、遅（上平四支）。

四〇　春暮遊小園　　春暮　小園に遊ぶ　王淇

一従梅粉褪残粧　一たび梅粉の残粧　褪せてより
塗抹新紅上海棠　新紅を塗抹して　海棠に上らしむ
開到荼蘼花事了　開きて荼蘼に到れば　花事　了し
糸糸天棘出莓牆　糸糸たる天棘　莓牆より出づ

【詩題】『全宋詩』巻三五二一「暮春遊小園」。

【作者】王淇、字は菉漪。南宋末の詩人で、謝枋得と交友があった。

【詩句】第二句「塗」、『全宋詩』「涂」。

【大意】春の終わりに小さな庭園を訪れた際の感慨をうたう。ひとたびウメの花の白い化粧が色あせて来ると、今度はカイドウの花が新たに赤い化粧を顔に塗り始める。トキンイバラの番になると花は一通り咲き終わり、あとは糸のように細いクサスギカズラが、苔むした垣根から顔をのぞかせているばかり。（春は今まさに終わろうとしている。）

【補足】荼蘼は、酴醾（一五参照）に同じ。ここでは『注解』の表記に従う。天棘は植物名。現在の天門冬。和名クサスギカズラ。

【韻字】粧、棠、牆（下平七陽）。

四二　暮春即事　　暮春　事に即す　　葉采

双双瓦雀行書案　　双双として　瓦雀　書案を行き
点点楊花入硯池　　点点として　楊花　硯池に入る
閑坐小窓読周易　　小窓に閑坐し　周易を読む
不知春去幾多時　　知らず　春　去りて　幾多の時ぞ

【詩題】『全宋詩』巻三三三八「書事」。
【作者】葉采、号は平岩。南宋の儒者。『注解』は葉李とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】暮春の感慨をうたう。つがいのスズメが文机の前を通り過ぎて行き、ぽつりぽつりと柳絮が硯の墨汁の中に落ちる。私は小さな窓辺に静かにすわり、『易経』を読みふけっている。春が過ぎ去ってから、どれほどの時間が過ぎたことだろうか。（読書に夢中で、全然気がつかなかった。）
【韻字】池、時（上平四支）。

四四　蚕婦吟　　蚕婦吟　　謝枋得

子規啼徹四更時　　子規　啼きて徹す　四更の時
起視蚕稠怕葉稀　　起きて蚕の稠れるを視　葉の稀なるを怕る
不信楼頭楊柳月　　信ぜず　楼頭　楊柳の月
玉人歌舞未曾帰　　玉人　歌舞して　未だ曾て帰らざるを

【詩題】『全宋詩』巻三四八〇「蚕婦吟」。
【作者】謝枋得は既出。南宋末の詩人。
【詩句】第四句「歌舞」、『注解』は「舞歌」とするが、『全宋詩』に従う。
【大意】養蚕に従事する女性の労働と心情をうたう。ホトトギスは夜明け前まで鳴き続けている。自分は起きてカイコが密集しているのを見、クワの葉が残り少なくなっていることを心配する。そんな自分には、とても信じられない。高楼のあたり、ヤナギの葉に隠れる月がかかっているというのに、高貴なお方は歌や踊りの遊びに夢中で、まだ帰っていないだなんて。
【韻字】時（上平四支）。稀、帰（上平五微）。

四九　客中初夏　　客中の初夏　　司馬光

四月清和雨乍晴　　四月　清和にして　雨　乍ち晴る
南山当戸転分明　　南山　戸に当たり　転た分明なり
更無柳絮因風起　　更に柳絮の風に因りて起くる無く
惟有葵花向日傾　　惟だ葵花の日に向かいて傾くのみ有り

【詩題】『全宋詩』巻五一二「居洛初夏作」。
【作者】司馬光、字は君実、号は迂叟。北宋の詩人。歴史書

『資治通鑑』の著者として知られる。

【詩句】第三句「因」、『全宋詩』「随」。

【大意】王安石の新法に反対して洛陽に隠居中の作者が、初夏の情景をうたう。初夏の四月は爽やかかつ穏やかで、雨はさっと晴れ上がる。南側の山はわが家の戸口の真向かいにはっきりと見える。その上、柳絮が風に舞い上がることもなく、ただフユアオイの花が太陽に向かって傾くばかり。

【韻字】晴、明、傾（下平八庚）。

五〇　有約　　約有り　　趙師秀

黄梅時節家家雨　　黄梅の時節　家家の雨
青草池塘処処蛙　　青草の池塘　処処の蛙
有約不来過夜半　　約有るも来たらず　夜半を過ぎ
閑敲棋子落灯花　　閑に棋子を敲きて　灯花を落とす

【詩題】『全宋詩』巻二八四一「約客」。

【作者】趙師秀、字は紫芝、号は霊秀。南宋の詩人で「永嘉の四霊」の一人。『注解』は司馬光とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。

【大意】梅雨の夜に友人を待ちわびる心情をうたう。梅の実が黄色くなる時節は、どの家もどの家も雨の中。青い草の茂る池のそこかしこから、カエルの鳴き声が聞こえる。約束をしたのに友人はやって来ず、真夜中を過ぎてしまった。退屈のあまり碁石をパチリと打つと、灯火の燃えかすがポトリと落ちた。

【韻字】蛙、花（下平六麻）。

五一　三衢道中　　三衢の道中　　曾幾

梅子黄時日日晴　　梅子　黄なる時　日日に晴れ
小溪汎尽却山行　　小溪　汎かび尽くし　却た山行す
緑陰不減来時路　　緑陰　来時の路に減ぜず
添得黄鸝四五声　　添え得たり　黄鸝の四五声

【詩題】『全宋詩』巻一六五九「三衢道中」。三衢は、山名。

【作者】曾幾、字は吉甫、号は茶山。北宋末から南宋初の詩人で、大詩人陸游の師。『注解』は曾紆とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】第二句「汎」、『全宋詩』「泛」。

【大意】春の終わりから初夏にかけての江南の山旅の情景をうたう。梅の実が黄色くなる頃なのに、なぜか晴天が続く。小さな谷川に小舟を浮かべ、終点まで来ると、今度は山道を歩いて行く。緑の木立は来た時の道と同じように生い茂っており、それに加えて、今ではそこかしこから、コウライウグイスの鳴き声が四つ、五つと聞こえて来る。

【韻字】晴、行、声（下平八庚）。

五八　村庄即事　　村庄即事　　翁巻

緑遍山原白満川　　緑　山原に遍く　白　川に満つ
子規声裏雨如煙　　子規声裏　雨　煙るが如し
郷村四月閑人少　　郷村　四月　閑人　少なり
纔了蚕桑又挿田　　纔く蚕桑を了し　又た田に挿す

【詩題】『全宋詩』巻二六七三「郷村四月」。なお「庄」は「荘」の俗字であるが、『注解』の表記に従う。
【作者】翁巻、字は続古、または霊舒。南宋の詩人で「永嘉の四霊」の一人。『注解』は范成大とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】初夏の農村の情景をうたう。山も野原もあたり一面の緑。田んぼは水を満々とたたえ、白く光り輝いている。ホトトギスの鳴き声が聞こえる中、雨がけぶるように降っている。初夏四月の農村には、閑をもてあましている者はほとんどいない。ようやくカイコにクワの葉を与える作業が終わったと思ったら、今度はすぐ田植えに取りかかる。
【補足】「川」は日本語の「かわ」ではなく、ここでは水を張った水田をさす。
【韻字】川、煙、田（下平一先）。

六〇　村晩　　村晩　　雷震

草満池塘水満陂　　草　池塘に満ち　水　陂に満つ
山銜落日浸寒漪　　山　落日を銜み　寒漪に浸る
牧童帰去横牛背　　牧童　帰り去りて　牛の背に横たわり
短笛無腔信口吹　　短笛　腔無く　口に信せて吹く

【詩題】『全宋詩』巻三五九四「村晩」。
【作者】雷震は南宋の詩人。
【詩句】第一句「池」、『全宋詩』「寒」。
【大意】のどかな村の夕暮れの情景をうたう。草は池のまわりに生い茂り、水は池の岸まで満ちている。山のかげに隠れつつある夕陽は、冷たいさざ波にその姿を映している。仕事から帰って来た牧童は牛の背中にすわり、短い笛を、これといった曲調もなく、口まかせに吹いている。
【参考】意味からすると「帰来」であるべき所を「帰去」とするのは、平仄の都合によるものであろう。後出の銭起「帰雁」の「飛来」も同様である。
【韻字】陂、漪、吹（上平四支）。

六一　茅簷　　茅簷　　王安石

茅簷常掃浄無苔　　茅簷　常に掃き　浄らかにして苔無し

花木成蹊手自栽　花木　蹊を成し　手自ら栽う
一水護田将緑遶　一水　田を護り　緑を将いて遶り
両山排闥送青来　両山　闥を排し　青を送り来たる

【詩題】『全宋詩』巻五六六「書湖陰先生壁二首」其一。
【作者】王安石は既出。北宋の代表的な詩人。
【詩句】第一句「常」、『全宋詩』「長」。第二句「蹊」、『全宋詩』「畦」。
【大意】隠居後の作者が、隣人の隠者（湖陰先生）の住まいをうたう。茅の軒端はいつも掃除され、こざっぱりとして苔も生えていない。花の咲く木々が小道に沿って立ち並んでいるのは、隠者が手ずから植えたもの。ひと筋の小川が田地を守るかのように緑の色でまわりをぐるっと取り囲み、家の門をがらっと開ければ、二つの山が青い色を送り込んで来る。
【韻字】苔、栽、来（上平十灰）。

六四　黄鶴楼聞笛　黄鶴楼にて笛を聞く　李白

一為遷客去長沙　一たび遷客と為りて長沙を去り
西望長安不見家　西のかた長安を望むも　家を見ず
黄鶴楼中吹玉笛　黄鶴楼中　玉笛を吹く
江城五月落梅花　江城　五月　落梅花

【詩題】『全唐詩』巻一八二「与史郎中欽聴黄鶴楼上吹笛」。『注解』は「題北謝碑」とする。「謝」は「榭」であろうが、わかりにくいので『唐詩別裁集』の詩題を借用する。
【作者】李白は既出。盛唐の代表的な詩人。
【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。
【大意】流罪の身となった作者が、笛の音を聞いて感慨を催す。ひとたび流罪の身となり、長沙に向かう賈誼のように夜郎へと向かうことになった。西の方角にある長安を眺めても、自分の家を見ることはできない。ここ武昌の黄鶴楼の中で、美しい笛の音を聴いている。長江のほとりの町で、真夏の五月に「梅花落」の曲を。
【補足】前漢の賈誼は讒言を信じた皇帝にうとまれ、長沙に左遷された。この詩で李白は自分を賈誼になぞらえている。
【韻字】沙、家、花（下平六麻）。

六五　題淮南寺　淮南の寺に題す　程顥

南去北来休便休　南へ去り　北より来たり　休まば便ち休め
白蘋吹尽楚江秋　白蘋　吹き尽くされて　楚江　秋なり
道人不是悲秋客　道人　是れ秋を悲しむの客ならず
一任晩山相対愁　一任す　晩山　相対して愁うるに

【詩題】『全宋詩』巻七一五「題淮南寺」。

【作者】程顥は既出。北宋の代表的な儒者。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】秋の旅の感慨。南へ北へと行き交う旅人たちよ、休みたければ休んで行くがよい。白い花を咲かせる浮き草は吹き尽くされ、楚の国の川のほとりの秋は深まる。だが物の道理を深く知る私は、秋を悲しむ旅人ではない。日暮れ時の山々が向かい合って愁い悲しむのに、まかせておくことにしよう。
【韻字】休、秋、愁（下平十一尤）。

六六　秋月　　朱熹

清渓流過碧山頭　清渓　流れ過ぐ　碧山の頭
空水澄鮮一色秋　空水　澄鮮　一色の秋
隔断紅塵三十里　紅塵を隔て断つこと　三十里
白雲紅葉両悠悠　白雲　紅葉　両つながら悠悠

【詩題】『全宋詩』巻二三八四「入瑞巖道間得四絶句呈彦集充父二兄」其三。
【作者】朱熹は既出。南宋の代表的な儒者。『注解』は程顥とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】第四句「紅」、『全宋詩』「黄」。「両」、『全宋詩』「共」。
【大意】秋の山旅の感慨をうたう。清らかな谷川は、青々とした山のすぐそばを流れて行く。空も水も澄みわたり、一面の秋景色である。俗塵にまみれた世の中を、はるか遠く隔てること三十里。白い雲と赤いもみじは、どちらもゆったりしている。
【補足】詩題は「秋月」であるが、うたわれているのは日中の情景であり、どこにも月はうたわれていない。そもそも昔の旅は基本的に日中に行われた。ひとまず『注解』に従う。
【韻字】頭、秋、悠（下平十一尤）。

七〇　中秋　　蘇軾

暮雲収尽溢清寒　暮雲　収まり尽くして　清寒　溢る
銀漢無声転玉盤　銀漢　声無く　玉盤を転ず
此生此夜不長好　此の生　此の夜　長には好しからず
明月明年何処看　明月　明年　何れの処にて看ん

【詩題】『全宋詩』巻七九八「陽関詞三首」其三「中秋月」。
【作者】蘇軾、字は子瞻、号は東坡居士。北宋の代表的な詩人。『注解』は杜牧とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】中秋の夜に、月を見ながら人生の無常を思う。暮れ方の雲はすっかり消えてしまい、清らかな寒気が満ちあふれる。天の河の上を音もなく、白玉の盆のような月がころがるように移って行く。私のこの一生も、このすばらしい夜も、いつまでも良いままではあり得ない。この明月を来年は、いったいどこ

で見ることになるのだろうか。

【韻字】寒、盤、看（上平十四寒）。

七一　江楼有感　　江楼にて感有り　　趙蝦

独上江楼思悄然　　独り江楼に上れば　思い　悄然たり
月光如水水如天　　月光は水の如く　水は天の如し
同来玩月人何在　　同に来たり月を玩びし人は何くにか在る
風景依稀似去年　　風景　依稀として去年に似たり

【詩題】『全唐詩』巻五五〇「江楼旧感」。

【作者】趙蝦、字は承祐。晩唐の詩人。

【詩句】第一句「悄」、『全唐詩』「渺」。第三句「玩」、『全唐詩』「望」。「在」、『全唐詩』「処」。

【大意】川のほとりの高楼に登り、昔を思う。ただ一人、川辺の高楼にのぼれば、しんみりした気持ちになる。月の光は水のように澄みわたり、川の水は大空のように広々としている。一緒にここに来て月をめで楽しんだ人は、今はどこにいるのだろうか。風景だけはどうやら去年と同じように見えるのだが。

【補足】『唐詩選』にも見える有名な詩であるが、文字の異同が多い。

【韻字】然、天、年（下平一先）。

七二　西湖　　西湖　　林升

山外青山楼外楼　　山外の青山　楼外の楼
西湖歌舞幾時休　　西湖の歌舞　幾時か休まん
暖風薫得遊人醉　　暖風　遊人を薫り得て醉わしめ
直把杭州作汴州　　直ちに杭州を把りて汴州と作す

【詩題】『全宋詩』巻二六七六「題臨安邸」。臨安は現在の浙江省杭州。南宋の行在所。そこの邸（旅館）の壁に書きつけた詩、の意。

【作者】林升、字は夢屏。南宋の詩人。『注解』は林洪とするが、『全宋詩』に従う。

【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。

【大意】失地回復を忘れ、遊宴にふける南宋の為政者たちを風刺する。ここ杭州は青い山の向こうにまた青い山があり、高楼の向こうにまた高楼がある。西湖でにぎやかに繰り広げられる歌や踊りは、一体いつ終わるのだろうか。あたたかい風に吹かれて行楽客たちはすっかり酔い心地になり、この杭州を、ただもう旧都の汴州（開封）と同一に見なしているかのようだ。

【補足】宋（北宋）は都の開封を異民族に攻め落とされ、南の杭州に遷った。最初は失地回復を掲げていたが、和議（講和条約）によってともかくも安定が得られると、その抗戦の意志は徐々にトーンダウンして行く。結局志を果たせぬまま、最後は

モンゴルの元に滅ぼされた。

【韻字】楼、休、州（下平十一尤）。

七六　水亭　　水亭　　蔡確

紙屏石枕竹方床　　紙の屏　石の枕　竹の方床
手倦抛書午夢長　　手　倦み　書を抛ち　午夢　長し
睡起莞然成独笑　　睡りより起き　莞然として独笑を成す
数声漁笛在滄浪　　数声の漁笛　滄浪に在り

【詩題】『全宋詩』巻七八三「夏日登車蓋亭十絶」其四。車蓋亭は湖北省安陸にあった亭の名。

【作者】蔡確、字は持正。北宋の詩人。

【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。

【大意】水辺のあずまやでくつろぐ詩人の姿をうたう。紙の屏風でまわりを囲み、石の枕に頭をのせ、竹製の四角い寝床に横になる。手が疲れたので書物をほうり投げ、いい気持ちになってぐっすりと眠り、昼寝の夢を楽しむ。眠りから覚めて起き、にっこりと一人で笑う。漁船の合図の笛の音が数回、青い波の上から聞こえて来る。

【補足】作者は左遷先でこの詩を作り、その内容が取り沙汰されて更に遠隔の地に追いやられた。謹慎中の身なのに、何を一人で笑っているのか、というのである。

【韻字】床、長、浪（下平七陽）。

七八　竹楼　　竹楼　　李嘉祐

傲吏身閑笑五侯　　傲吏　身は閑にして五侯を笑い
西江取竹起高楼　　西江より竹を取り　高楼を起つ
南風不用蒲葵扇　　南風　用いず　蒲葵の扇
紗帽閑眠対水鷗　　紗帽　閑眠して水鷗に対す

【詩題】『全唐詩』巻二〇七「寄王舍人竹楼」。

【作者】李嘉祐、字は従一。中唐の詩人。

【詩句】『全唐詩』文字の異同なし。

【大意】竹で楼閣を作り、その中でくつろぐ姿をうたう。世事に超然とした小役人は仕事も少なく閑暇で、五人の貴顕などものともせず、西江から竹を切って来て高い楼閣を建てた。夏の風が吹いて来ても、ビロウの扇を用いる必要はない。紗の帽子をかぶって静かに眠り、水に浮かぶカモメに向き合っている。

【補足】蒲葵（ビロウ）は、ヤシ科の常緑高木。その葉を扇にするのであろう。

【韻字】侯、楼、鷗（下平十一尤）。

八〇　観書有感　　書を観て感有り　　朱熹

半畝方塘一鑑開　　半畝の方塘　一鑑　開き
天光雲影共徘徊　　天光　雲影　共に徘徊す
問渠那得清如許　　渠に問う　那ぞ清きこと許の如くなるを得たると
為有源頭活水来　　源頭より活水の来たること有るが為なり

【詩題】『全宋詩』巻二三八四「観書有感二首」其一。
【作者】朱熹は既出。南宋の代表的な儒者。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】読書における感慨。小さな四角い形の池に張った水は、あたかも鏡のふたを開けたよう。その水面には空の光と雲の影が共に映し出され、ゆっくり動いている。池の水に「どうしてそんなに清らかでいられるのか」とたずねたところ、「水源からいつも新鮮な水が流れて来るからだ」と答えた。
【補足】読書が有益であることを、比喩を用いてうたう。小さな四角い池は書物をたとえる。流れて来る新鮮な水は、儒学の正統の教えのたとえ。
【韻字】開、徊、来（上平十灰）。

八一　泛舟　　舟を泛かぶ　　朱熹

昨夜江辺春水生　　昨夜　江辺　春水　生じ
艨艟巨艦一毛軽　　艨艟　巨艦　一毛のごとく軽し
向来枉費推移力　　向来　枉げて推移の力を費やせるに
此日中流自在行　　此の日　中流を自在に行く

【詩題】『全宋詩』二三八四「観書有感二首」其二。
【作者】朱熹は既出。南宋の代表的な儒者。
【詩句】第二句「艨艟」、『全宋詩』「蒙衝」。
【大意】前詩と同じく、読書における感慨をうたう。昨夜、川辺に春の水がわいて来た。おかげで軍艦のように大きな船も、ひとすじの髪の毛のように軽々と水に浮かぶ。これまで前へ進もうとする力を無駄に費やしてきたが（うんうんうなっても前に進まなかったが）、今日は流れの中を自由自在に進んで行くことができる。
【補足】八〇と連作。十分な水があれば重い軍艦も水に浮かぶように、十分な知識が蓄積され、しかるべき時が来れば、学問はおのずとはかどることをたとえる。
【韻字】生、軽、行（下平八庚）。

八二　冷泉亭　　冷泉亭　　林稹

一泓清可沁詩脾　一泓　清くして詩脾に沁むべし
冷暖年来只自知　冷暖　年来　只だ自ら知る
流向西湖載歌舞　流れて西湖に向かい　歌舞を載せ
回頭不似在山時　頭を回らせば　是れ山に在る時に似ず

【詩題】『全宋詩』巻一〇三一「冷泉」。冷泉亭は杭州の西湖のほとりにある。
【作者】林稹、字は丹山。北宋の詩人。『注解』は林洪とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】西湖の冷泉亭から流れ出る水をうたう。深く清らかな泉の水は、それを飲むと詩人の心にしみわたる。しかしその寒暖の変化は、来る年も来る年もただ泉の水自身が知るばかり（まだ世に知られず孤独である）。それが、西湖に流れ出て歌舞音曲の船を載せるようになり、ふとふり返ってみると、もはや以前山にあった時のような清らかさは失われているのだ。
【補足】世俗と交わることで純粋な初心が失われることを、泉の水にたとえてうたう。
【韻字】脾、知、時（上平四支）。

八三　冬景　　冬景　　蘇軾

荷尽已無擎雨蓋　荷は尽きて　已に雨に擎ぐるの蓋無く
菊残猶有傲霜枝　菊は残なわるるも　猶お霜に傲るの枝有り
一年好景君須記　一年の好景　君　須らく記すべし
最是橙黄橘緑時　最も是れ　橙は黄に　橘は緑なる時

【詩題】『全宋詩』巻八一五「贈劉景文」。劉景文は前出の劉季孫（二七参照）のこと。
【作者】蘇軾は既出。北宋の代表的な詩人。
【詩句】第四句「最」、『全宋詩』「正」。
【大意】晩秋から初冬にかけての情景に託して、老境を迎えた友人を励ます。ハスはすっかり枯れて、雨をさえぎる大きな傘のような葉はもうない。菊はしおれてしまったが、霜に打たれてもびくともしない茎はまだある。一年で最もすばらしい情景を、貴君、是非心にとめていただきたい。それは、ユズは黄色くなり、タチバナはまだ緑色の今の季節なのだ。
【韻字】枝、時（上平四支）。

八七　梅　　梅　　王淇

不受塵埃半点侵　受けず　塵埃の半点も侵すを
竹籬茅舎自甘心　竹籬　茅舎　自ら心に甘んず

只因誤識林和靖　只だ誤りて林和靖に識らるるに因り
惹得詩人説到今　惹き得たり　詩人の説きて今に到るを

【詩題】『全宋詩』巻三五二一「梅」。
【作者】王淇は既出。南宋末の詩人。
【詩句】『全宋詩』文字の異同なし。
【大意】梅の花をうたう。高潔な梅の花はほんのわずかばかりの塵ほこりもわが身に受け付けず、竹の垣根に囲まれたあばら屋に生えても、それに甘んじている。ただ、間違って林逋と知りあいになったばかりに、今日に至るまで数知れない詩人たちにうたわれることになってしまった。（それは決して梅の本意ではないのだ。）
【補足】林逋（林和靖）は北宋の隠逸詩人。梅をこよなく愛したことで知られる。代表作は七言律詩「山園の小梅」。
【韻字】侵、心、今（下平十二侵）。

九〇　雪梅　　雪梅　　方岳

有梅無雪不精神　梅有りて雪無ければ　精神ならず
有雪無詩俗了人　雪有りて詩無ければ　人を俗了す
日暮詩成天又雪　日暮　詩　成り　天　又た雪ふる
与梅并作十分春　梅と并せて作す　十分の春

【詩題】『全宋詩』巻三一九九「梅花十絶」其九。『注解』「〈雪梅〉又」。
【作者】方岳、字は巨山、号は秋崖。南宋の詩人。『注解』は盧梅坡とするが、『全宋詩』に従う。
【詩句】第三句「日」、『全宋詩』「薄」。第四句「并」、『全宋詩』「併」。
【大意】春を迎えるには梅と雪と詩の三つが欠かせないことをうたう。梅があっても雪がなければ、どうもパッとしない。雪があっても詩がなければ、人が野暮ったくなる。日暮れ時になって詩が出来上がり、空から雪も降って来た。梅とあわせて、これで十分に春となった。
【韻字】神、人、春（上平十一真）。

九一　秦淮夜泊　　秦淮に夜泊す　　杜牧

煙籠寒水月籠沙　煙は寒水を籠め　月は沙を籠む
夜泊秦淮近酒家　夜　秦淮に泊すれば　酒家に近し
商女不知亡国恨　商女は知らず　亡国の恨み
隔渓猶唱後庭花　渓を隔てて猶お唱う　後庭花

【詩題】『全唐詩』巻五二三「泊秦淮」。
【作者】杜牧、字は牧之。晩唐の代表的な詩人。
【詩句】第四句「渓」、『全唐詩』「江」。

【大意】盛り場の夜の情景をうたう。夕もやは冷たい水の上にたちこめ、月の光は水辺の砂を照らす。夜、南京の秦淮河に小舟を停泊させたところ、妓楼の近くであった。妓女たちは亡国の恨みも知るまいに、川の向こうで今でもなお陳の後主が作った「玉樹後庭花」を歌っている。

【補足】南京は、南北朝時代、南朝の歴代王朝が都を置いた町。陳の後主は南朝最後の君主。その「玉樹後庭花」は後宮の女性の美しさをうたった詩で、陳が滅びた結果、亡国の詩として知られるようになった。

【韻字】沙、家、花（下平六麻）。

九三　帰雁　　錢起

瀟湘何事等閑回　　瀟湘　何事ぞ　等閑に回る
水碧沙明両岸苔　　水は碧に　沙は明らかに　両岸は苔むせるに
二十五絃弾夜月　　二十五絃　夜月に弾ずれば
不勝清怨却飛来　　清怨に勝えず　却って飛来す

【詩題】『全唐詩』巻二三九「帰雁」。

【作者】錢起、字は仲文。中唐の詩人で「大暦十才子」の一人。

【詩句】第三句「絃」、『全唐詩』「弦」。

【大意】北へ帰る渡り鳥の雁をうたう。雁に「どうしてこの美しい瀟湘の地を離れて、そそくさと北へ帰って行くのか。川の水はみどりに澄み、岸の白砂は明るく輝き、川の両岸には苔が生えているのに」とたずねたところ、雁は「月夜に湘水の女神が二十五弦の大琴を奏で、その音色があまりにもの悲しいので、北へ飛び帰るのだ」と答えた。

【韻字】回、苔、来（上平十灰）。

九四　題壁　　無名氏

一団芳草乱蓬蓬　　一団の芳草　乱れて蓬蓬たるも
驀地焼天驀地空　　驀かに天を焼き　驀かに空し
争似満炉煨榾柮　　争でか似ん　炉に満つる煨榾柮の
漫騰騰地暖烘烘　　漫なること騰騰として　暖かきこと烘烘たるに

【詩題】『全宋詩』巻三七三七「題峻極中院法堂壁」。

【作者】この詩は『全唐詩続補遺』に五代・韋穀の作品として見える。錢鍾書『宋詩紀事補正』（遼寧人民出版社、遼海出版社、二〇〇三年）第十二冊五九九八頁参照。

【詩句】第三句「柮」、『全宋詩』「楔」。第四句「暖」、『全宋詩』「熱」。

【大意】お寺の壁に書きつけた詩。ひとかたまりの茅草はぼうぼうと乱れているが、火をつければ一瞬で燃え上がり、また一

瞬で消えてしまう。囲炉裏にいっぱいの木の根っこが埋(うず)み火の中でゆっくりじっくり燃えて、ぽかぽかとあたたかいのに、どうして似ていようか。

【補足】一瞬で燃え上がりまた消える炎は、つかの間の栄達をきわめ、ただちに身を滅ぼす者のたとえ。地味でも長持ちする方がいいという、処世訓の詩。

【韻字】蓬、空、烘（上平一東）。

おわりに

以上、前回の拙稿とあわせて『千家詩』の七言絶句九十四首をともかくも一通り紹介することができた。我ながらいかにも荒削りなものであり、細部に更に検討を要する点は多々あると思われる。より完成度の高い訳注を仕上げることは今後の課題とさせていただきたい。

最後に、これらの詩を概観して気づいたことを簡単に記しておく。今回紹介したのはすべて『分門纂類唐宋時賢千家詩選』（以下『分門』と略記）に見えない詩であるが、大まかに二つに分けて考えることができるように思われる。

まず一つは、『分門』の詩とそれほど大きな差異の認められない詩。仮に『分門』に含まれていたとしても、さほど違和感のない詩である。たとえば韓愈の「初春小雨」（〇六）や司馬光の「客中初夏」（四九）などは『分門』の「時令門（季節の詩）」に、王安石の「元日」（〇七）や蘇軾の「中秋」（七〇）などは同書の「節候門（節日の詩）」にそれぞれ含まれていたとしても、決して不自然ではあるまい。[1] これらは言わば『分門』の本来のあり方に沿った自然な拡充と言えよう。

もう一つは、これとは対照的に『分門』の諸作品とはやや異質な詩である。

その第一は、程顥（〇一、六五）、朱熹（〇二、八〇、六六、八一）、張栻（〇九）、葉采（四二）といった宋代の儒者たちの詩である。彼らはもとより碩学(せきがく)であろうが、必ずしも本職の詩人ではない。彼らの詩が『千家詩』に加えられたことは、この書物に漂う道学臭の一代源泉となっているかに思われる。特に朱熹や葉采の「読書治学」に関する詩は、そのことを強く感じさせる。

第二は、ある種の世俗的な教訓の詩、もしくは陳腐な道理を説く詩である。たとえば林升（七二）、林稹（八二）、王淇（八七）、無名氏（九四）などの作品は『千家詩』の世俗的な性格を一層強めると同時に、これらほぼ無名の小詩人の作品が錚錚(そうそう)たる大家の名作と入り混じることによって、同書の玉石混淆な印象をいや増す結果となっている。

第三に、李白の詩三首（一四、二六、六四）である。これらはいずれも人口に膾炙(かいしゃ)した名作であるにもかかわらず、『分門』には含まれていない。杜甫と並んで盛唐を代表する李白はそれこそ「錚錚たる大家」であるが、『分門』は南宋後期の一

般人向けに編まれた作詩の参考書であるから、この自由奔放な天才詩人の作品はお手本には向かないということで敬遠されたのではなかろうか。

以上のような拡充が行われたことで、『千家詩』は『分門』を一応その基礎としつつも、『分門』とはいささか異なる様相を呈するに至った。すなわち、一層その雑居性（良く言えば多様性）を増し、単一の尺度では計り切れない複雑な様相を呈することになったと思われる。現段階で言えるのはこの程度のことであるが、現在のような『千家詩』がどのようにして形成されて行ったのかについては、更に探求を継続して行きたい。

この他、今後の課題として、『千家詩』所収の七言律詩などその他の形式の作品についても七言絶句と同様の探求を行うことがあげられる。微力の身でどこまで具体化できるかわからないが、『千家詩』とのかかわりはこれからも続いていくことであろう。今回はひとまずこの辺で筆を擱くことにしたい。

注

（1）『分門』の分類については、拙稿「『分門纂類唐宋時賢千家詩選』所収の『千家詩』七言絶句」（『言語と文化』第四十五号）参照。

おわびと訂正

『言語と文化』第四十三号（二〇二〇年七月）に発表した拙稿「『千家詩』所収作品の日本における紹介状況―七言の作品を中心に―」一三八頁下段に「【宋】杜牧」とあるのは、「【唐】杜牧」の誤りです。また一二九頁上段に「松浦『続鑑賞辞典』とあるのは「松浦『続解釈辞典』」の誤りです。おわびして訂正します。『千家詩』はもとより問題点の多いテキストですが、だからと言って研究する側にミスがあってよいことにはなりません。気を引き締めて作業にあたらせていただきます。